

2月中旬、大地は ふきのとうが芽を出し、続いて 春を告げる福寿草が顔を出しました。もうやはり春が来ちゃったという冬の終わりを告げるような季節を感じています。10年に1度の大雪なんて言葉を幾度もニュースを聞いた割には、結局いつもの通り、暖冬で少雪だったような気がします。子ども達の顔も、年々黒さがなくなっていくような気がします。以前は、ひな祭り会の時期のは、皆雪焼けで真っ黒だったような気がします。

それでも、大地は、どんな吹雪でも低温でも毎日確実に外遊び雪遊びをくりかえしてきました。そり滑りはもちろん、裏山でのお尻ボブスレー（樹木間を20メートルぐらいお尻や胸で滑って行く遊び）、サンクゼール駐車場前の大地車庫裏の広大なリング畑跡の広場周辺での雪遊び、そして クロカン遠征など、一日も欠かさず雪遊び。そこには、たき火があり、煙が上がる中で、焼き芋 豆焼き、お餅焼きなどを同時に楽しみました。真白な雪野原に雪穴を掘り、器用にうちわでたき火を作っていく作業は、見た目よりも大変です。極寒の中でも、手袋を脱ぎ、新聞紙や細かい薪を並べ、うちわで細々と火が消えないように扇ぎ、根気強くたき火を作っていく。ようやく燃え盛る頃には、片付けの時間になってしまったり、遊びに夢中で、結局誰もたき火に来なかつたこともあります。でも、きっと、おはなしの「山の上の火」のように、その世界に煙があったり、たき火の姿があったりするだけで、安心し、暖かい気分になっているにでしょう。そんなたき火の力に感謝しながら、去りゆく冬を惜しみ、ほのぼのとした春を待つ子ども達です。

【初めての結婚式場】



4兄弟の末っ子の青山家初めての結婚式が京都で行われた。半年ぐらい前に、当今の結婚式はどの位の費用がかかるものか聞いて30から50と言われ、実は勘違いで、300万から500万（自分では30万から50万と思っていた）と聞いて驚いた。車、家、海外旅行などに使える位だ！！と仰天した。だ。それでも、現在は 家同士の結婚ではなく、自立した夫婦として歩んでいるものだから、自分たちで決めて、それが幸せだと感じていれば良い、と見守った。総勢120名（本当は150名位を呼びたかったが）で、そのうちの100名は同年齢世代の若者で、皆京都まで来てくれた。会社の上司や来賓はいないらしい。

そんな中、ウェルカムボードと 両家を代表して、父親に挨拶して欲しいと依頼が来た。今までの結婚式には 驢として記念プレートの木で作ってプレゼントしていたので、いつもの通り、祝婚歌（吉野弘）を書き入れ、時計（これは本人達からリクエストされ）を入れた。

そして 父親の挨拶。招待客達に、家を代表して感謝とこれから2人を見守って下さいなどの趣旨で両家を代表して父親が挨拶するのは、家同士の結婚式なら（家が結婚式や披露宴を取り仕切っていた昔なら）当たり前だが、今は、当事者が全てをきめているので、それを言うなら、本人達が皆に感謝の意とこれからもよろしくと挨拶するのが筋であると思い、父親の挨拶ではなくて、新婦の親も含めて、私たち親は、同年代の新郎新婦の若者達の未来にエールを送る挨拶をしようと考えた。そして、3日前に浮かんできた！！「あなたが夜明けをつげる子ども達」をギターで歌おうと。結婚式3日前にタイから帰国した末っ子にこれを伝えると、さすがにびっくりし「ギターを持ち込めるか」「歌は著作権の問題で大丈夫か」などと最初は引いていたが、こちらの趣旨を伝えると OK となった。（きっといつものごとく、この親はとんでもないことをしてくれると不安に思ったらしい。）

さて、結婚式当日。京都の実家にも居候したことがある末っ子は、長男家族（臨月に入ったため ビデオ出演）を除く兄弟家族や京都の叔母やいとこやその子どもまで、20名弱の親族とともに出かけた。そして、120名の参列者が教会風（たぶん教会）に入った。が、そこには 正面には牧師さんいなければ何もなくて、横のテーブルの上には、ただ私が作ったウェルカムボードが、ただ、横になっておかれており、しかも時計の時刻も狂っていた。皆静かにしている訳でもなくわいわいガヤガヤ。そのうちに 両親が呼ばれ、新郎が入場したら 妻は 末っ子に、タキシードの上着を、私は グローブ（白い手袋）を渡して欲しいと依頼された。傍にいた末っ子の友達に、こんなことなら、野球のグローブ（野球少年だった末っ子）を渡した方が盛り上がったのにと本気で考えたほどの、予期せぬ雰囲気を感じ始めていた。そして入場、あの神聖静寂な雰囲気ではなく、新郎新婦は笑顔で皆に手を振りながら、会場の人々は歓声をあげる渦中 歩いて行く姿を、後ろから両親は見守っている。

誓いの言葉は 友人2名がインタビュー形式で笑顔で質問し、新郎新婦がそれに答えた。指輪は、ガー君の子どもの兄妹が持って届けに来てくれた。そして 結婚証明書として、横にあるウェルカムボードを手にして、結婚した時刻にその狂っていた針を直した。司会者が、大地の木を使って作ったウェルカムボードが結婚証明書になった由来を話してくれ、更に、祝婚歌の全文を読んでくれた。（この文章が 参加者の心にかかなり響いたらしい）

皆の歓声の中、笑顔で2人で抱擁し（よくあるキスはなく）皆に花びらの祝福を受け、全員120名を、2階からの全員写真を（卒業アルバムのような）撮って終了となった。

次に 披露宴は。会場は 各友人知人毎に〇テーブルになっていたが、新郎新婦のひな壇はなく、椅子が2つあるのみ。結婚式の衣装で入場し、お色直しもなく最後まで椅子に2人で腰を下ろしていた。新婦の友人がフレンドリーな祝辞を述べ、新郎の僧侶の友人（共にシェアハウスで毎朝3時半に起きて、海岸で座禅をし、サーフィンをしてから出勤をした精神的な友としての友人）が挨拶乾杯をしてから、ずっと友人達と歓談していた披露宴。

そして、各テーブルにいつの間にか手紙が置かれていた。なんと、120名全員に新郎新婦からの直筆の便せん2枚程度の手紙がしたためられていた。周りを見回すと、ほとんどの人が感激で泣いていた。

新婦が母親に手紙を読み、新郎が友人達に立派な感謝の言葉を丁寧にしつかり述べた。いよいよ、最後の我々の締め言葉がやってきた。新郎の友人達のほとんどは顔見知りであり、新郎新婦のシェアハウス仲間の友人達も、2、3度大地へ泊まりに来ているので、客の8割方は、我々のことをよく知っている。

そんな若い世代に向かい、一応感謝の気持ちを述べた後、「口下手なので、歌を歌います」「これは、これから素晴らしい未来が待っている若い皆に送る歌です」と言って、ギターを持ち、ガー君もウクレレを持って準備。皆、すごい歓声で、ノリノリの曲を期待しているようだったが、前奏が始まると、皆静まりかえった。妻が 3番の前半の伴奏に合わせ、「人生いいことばかりではないかもしれませんが、でもどんな時でも、自分を信じて明日を信じて、心豊かに力強く今を生きよう」と述べ、♪たとえ悲しい今日があっても・・・と歌い、最後は 皆で ♪あなたが夜明けを告げる子ども達♪（皆、いつの間にかここだけは覚えてしまっていた）の大合唱となり、「みんなが夜明けを告げる子ども達だ、力強く負けないで生きていこう」と拳を振り上げて叫ぶので終了となった。

末っ子曰く、今回の結婚式は お世話になった友人知人に感謝を伝える機会と同時に、自分たちの周りにはこんなに素敵な人達が集っているんだ、こんな素敵な人たちに囲まれている姿を見てもらいたいという願いがあった。そして、親にもそんな友達を見てもらうのが親孝行であり、また、親にも 親という役割以上に、大切なゲストとして楽しんで欲しいと思った。本当に妻が名付けた雄和という名前の通り、素敵な人たちの和であったと同時に、結婚式の前想をことごとく裏切られた真心いっぱいの手作り感溢れるものであった。

最後に 父親への手紙には「自分の家が幼稚園で、ゲームやテレビの制限があって普通の人と違う環境なのが正直嫌な時期があった。でも大人になって幼稚園の保護者の方に出会い、友達を実家に連れてくるようになって、どれだけ恵まれた環境に育ったのかを強く実感するようになったよ・・・」